

九つの災害 （その3）「なおも頑ななファラオ」 出エジプト 9 章 1～35 節

同じ日光に照らされても、ろうは柔らかくなりますが、泥は固くなります。同じように神のことばを聞いた時、心を頑なにする人もいれば、喜んで受け入れる人もいます。主は心頑なにする人にも、みことばを受け入れる人にも、みことばを同じ様に語られる神様です。

エジプトの王ファラオは心頑なにして、イスラエルの人々をエジプトより去らせることを、拒みました。主は9回の災害をエジプトの上に行います。

今回は、第5回目の災害から学びます。

——— 第5の災害、(1～7節)「家畜の疫病」 ———

主は、イスラエルの民を去らせようとしないうファラオに対して、家畜の上に重い疫病が起こることを予告しました。(3 節) 主はファラオに対して、モーセを通して次の様に言われました。「・・・見よ、主の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に重い疫病が起こる・・・」さらに (5 節)「主は時を定めて言われた。『明日、主がこの地でこのことを行う。』」

エジプトでは家畜が疫病で死ぬということは、それはごく普通のことでした。そこで、神様はその災いが自然災害でなく、神の業であることを教えるために 3 つのしるしを行いました。

——— 3 つのしるし ———

- ・その1、野原にいた家畜だけにこの災害が及びました。(3 節)
- ・その2、イスラエル人所有の家畜は疫病から免れました。(4 節)
- ・その3、神が時を定めた時に疫病は発生しました。(5 節)

(5、6 節)「・・・『明日、主がこの地でこのことを行う。』主は翌日そのようにされた。エジプトの家畜はことごとく死んだが、イスラエルの子らの家畜は一頭も死ななかった。」

(7 節、読む) その通りになりました。しかし、ファラオは相変わらず強情でした。それはおそらく、今回の災害によって、そんなに多くの打撃を受けなかったからかもしれません。

残念ですね。

——— 第6の災害、(8～12節、読む)「うみの出る腫れもの」 ———

第6の災害の特徴です。「うみの出る腫れもの」についてです。

- ・その1、この災害は、警告なしで行われました。第3の災害「ぶよ」の時もそうでした。
- ・その2、「呪法師たちは、腫れもののためにモーセの前に立て」ませんでした。(11 節) 呪法師たちは、奇跡のまねができないばかりか、自らも裁きの犠牲者になってしまいました。第2 テモテ 3:8、9 節「たぶらかしている者たちは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らった

ように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。しかし、彼らがこれ以上先に進むことはありません。・・・」

・その3、「主はファラオの心を頑なに」されました。(12節)

今まではファラオは自らの意思で、故意に自分の心を頑なにしていました。しかし、これからは違います。彼の罪の裁きとして神様が彼の心を頑なにされるのです。

(4:21節)「・・・わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない。」

(ローマ、1:24節)「そこで神は、彼らをその心の欲望のままに引き渡されました。・・・」

この様に、天に向かってつばきを吐くものは、その人の顔につばきは落ちて来ます。この様に自らの顔を汚す者となってしまいます。同様に、神様の御旨に逆らう者は、その報いを必ず、自らが受けることになります。気を付けなければなりませんね。

——— 第7の災害、(13～35節) 「雷、雹」 ———

(13～17節) それにしても、なぜ神はファラオがこれだけの悪を行っているのに彼を滅ぼさないでいるのでしょうか。ファラオの罪の故の災害が起こされているのに、ファラオやその民を滅ぼすことをしないのです。その理由は15、16節です。(読む) ファラオとその民が今まで、滅ばされなかったのは、神様のみ名と、その力を世界中に伝えるためでした。

ローマ 9:17節、「聖書はファラオにこう言っています。『このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。』」

——— 今まで、経験もしなかった様な災害 ———

ついに、主はエジプトで、今まで民が経験しなかった災害を予告しました。その災害とは。(17～19節)

・その1、野原にいた家畜の上に下った雷と雹です。(23～25節、読む)

しかし、神様はすべての人々を同じ様に愛される神様です。実はエジプト人の中にも神様を信ずる人たちがいました。主は彼らが自分たちの家畜を、野から家に連れ戻すだけの余裕を神様は与えられたのです。エジプトの人々でも、神は愛しておられチャンスが与えられました。(20節)「ファラオの家臣のうちで主のことばを恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた。」のです。この様に神のことばを聞いて家に避難した者たちと、家畜は救われました。

「しかし、主のことばを心に留めなかった者は、しもべたちと家畜をそのまま野に残しておいた。」(21節) 残念ですね。

・その2、イスラエルの民の住む、ゴシェンの地には雹は降りませんでした。(26節)

神様はイスラエルの人々を祝福されました。この災害は自然災害ではなく、神様の起こされた業であることがこれでますますはっきりと示されました。

・その 3、ファラオはひどい災害を受けると、「イスラエルを行かせるから除いてくれ」とモーセに頼みます。しかし、災いを取り除かれると心頑なになり、約束を破棄して行かせることをしませんでした。(27～30 節、読む)

それにしても、モーセは、この様な表面的な、ファラオの悔い改めの態度を知りつつも、この災害を取り除かれることを心から願い主に祈りました。モーセの心の広さを感じます。

しかし、やはり、それでも頑ななファラオの心は変わりませんでした。(34、35 節、読む)

本当に残念です。人は、天変地異にあった時、それが自らの心を入れ替える、生き方を変えるチャンスになります。

マルチン・ルターは、森の中で友人が落雷に打たれ即死したのをまじかに見て、神の臨在を感じ、罪を悔い改めて神の道に入りました。神様はある時、自然を通して人に働かれます。しかし、ファラオは、同じようなチャンスが与えられても、反対の道に行ってしまいました。

モーセの祈りは、天の戸を開くことは出来ましたが、ファラオのこころの戸を開くことは出来ませんでした。彼は最後の最後まで悔い改めの出来ない人でした。残念です。

最後に、有賀喜一先生の証から学びましょう。

その頃すでに、先生は献身をされて、ある牧師の下で仕えておられました。そんなある時の出来事です。いつもならば教会で奉仕をして、外出してはならない時間帯に、先生は大事な奉仕をさぼって映画を見に行きました。ところがある所で何と、スクリーンが繰り返し、繰り返し、真っ白になったそうです。「再臨か！」先生は全く平安がなくなって真っ直ぐに教会に帰りました。教会では、老牧師が黙々と教会の庭で野良仕事をしていました。その時の経験は先生の人生を変えた貴重な体験となりました。

クリスチャンは、神様の前に「何をするか」(doing) も大切ですが、それ以上に

神様の前に「どの様な態度であるか」(being) が大切なのですね。